

日本カフェ創成記

—明治時代末から大正時代初期にかけて現れたカフェープランタン、カフェーパウリスタを中心に—

The Account of Japanese Cafe Creation

今井 結希 (Yuki Imai) 指導：中村 要

本論文は、明治時代末に誕生し、日本にカフェを浸透させた「カフェープランタン」「カフェーパウリスタ」を中心に、日本におけるカフェの始まりについて考察したものである。

第1章「日本カフェ誕生前史」では、日本初の喫茶店といわれる可否茶館、本格的なカフェ誕生に影響を与えたパンの会、メーゾン鴻の巣について記した。これらを通して、カフェ誕生の土壌がどのように整えられていったのかを考察する。「パンの会」とは、日本でパリのカフェの疑似体験を試みることを目的として始まった文藝クラブである。パンの会のパリの文藝運動を模した擬似カフェ運動は、カフェと文藝を結びつけ、日本にもカフェの必要性を示した。この活動によってカフェを求める動きが芸術家たちを中心に広がっていく。明治43年ごろ「メーゾン鴻の巣」という洋食店が開店する。当時まだカフェらしいカフェはなく、多くの文人たちが鴻の巣に通っていた。ここでは雑誌『近代思想』の会合が開かれたり、『カフェエ夜話』という雑誌が発行されるなど、パリのカフェさながらの文藝交流が活発に行われていた。パンの会の活動とメーゾン鴻の巣に本格的なカフェ誕生の萌芽を見ることができる。

第2章「芸術家たちから生まれた「カフェープランタン」」では、日本初のカフェといわれるカフェープランタンについて記した。主人の松山省三はフランス帰りの洋画家である。帰国の時分、芸術家たちを中心にカフェを求める気運が高まっており、その想いを松山が具現化して生まれたのがカフェープランタンである。プランタンは芸術家たちによって誕生したのである。プランタンには様々な洋酒が取り揃えられており、カフェープランタンの「カフェー」はコーヒー飲用の場を意味するカフェではなかった。これは、

19世紀末のフランスのカフェが関係している。その当時、フランスのカフェではコーヒーよりも洋酒が主流になっていたのだ。プランタンは文士や芸術家たちが常連で、パリのカフェのような文学カフェの様相を呈していた。また、女性を給仕として採用した。これが後の日本独自のカフェ文化の1つである、「女給」につながっていく。

第3章「大衆喫茶店「カフェーパウリスタ」」ではカフェの大衆化、コーヒーの普及に大きく貢献したカフェーパウリスタについて記した。パウリスタは「ブラジル移民の父」として知られる水野龍によって、ブラジルコーヒーを宣伝普及するために作られたカフェである。パウリスタはコーヒー飲用の習慣づけと同時に、カフェの大衆化も促進した。パウリスタは、パリの歴史あるカフェ「カフェ・プロコップ」にヒントを得て、店内を豪華に飾り、給仕に少年を雇用していた。パウリスタもプランタン同様、フランスのカフェに学んでいたのだ。また、パウリスタは日本で初めて本格的なチェーン展開を行った。それにより、コーヒーの販路が拡大し、コーヒー飲用は都心だけでなく全国に広がっていき、カフェも全国へと拡大していったのである。パウリスタはコーヒーを飲み、自由に過ごす場としてのカフェ、つまり喫茶店を世の中に示したといえる。

明治時代は西欧を模倣することで近代化を図った。そうした時代の中で、カフェープランタン、カフェーパウリスタは誕生したのである。それぞれ開業背景、目的こそ異なっていたが、共にフランスのカフェを参考にしていた。両店が西洋、とくにフランスの影響下にあったことがわかる。日本のカフェは明治という近代化を推し進める時代の下で、西洋への憧憬、また、創始者たちの強い使命感によって誕生したのである。